
はじめに

皆さんは、「トリニダード・トバゴ（以下、本書ではTTと記す）」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。

ダンスや音楽好きの方であれば、ステイール・パンの発祥地、リオデジャネイロやベネチアと並びカーニバルで有名な国という知識をお持ちかもしれない。スポーツが好きな方は、陸上種目で活躍するTT人選手が印象に残っているかもしれない。また、エネルギー関連の仕事をしている方は、世界有数の産油国であるベネズエラと国境を接するTTもまたエネルギー産業を主な経済基盤としていることをご存じかもしれない。文学好きの方であれば、ノーベル賞作家のヴィディアダハル・スラヤプラサド・ナイポール（V・S・ナイポール）の名前を耳にされたことがあるかもしれない。

しかし残念ながら、一般の日本人の間ではTTの存在はあまりよく知られていない。TTは、本書の地図でも示したとおり、カリブ地域の東側に位置する小さな島国である。1962年に英国から独立した。隣国のベネズエラとは言語も政治体制も異なっている。だが、TTをはじめとするカ

リブの小さな島国は、「ラテンアメリカ」または「中南米」という括りの中では、メキシコやブラジル、アルゼンチンやキューバなどのような大国、政治的プレゼンスが大きな国の陰に隠れがちである。カリブの国々といっても、元スペイン領の国だけではなく、元英領、元仏領、元蘭領などバラエティに富んでいるが、TTはしばしばキューバなどのスペイン語圏の国々と同じ言語を話す国々、同じ文化を持つ国々といった誤解を受けやすい。また、TTは、主にトリニダード島とトバゴ島の2つの島から成るという事実も知られていないことが多い。

実際のところ、日本語でTTの情報を収集するのは簡単ではない。情報の多くはスタイル・パンやカーニバルに関するものが中心である。日本国内でTTの文化に触れ合える場所も限られている。日本語の単行本でTTはおろか、周辺のカリブの小国を単体で扱ったものはほとんど存在しない。同じカリブでも次々と新しい著作が発表されるスペイン語圏のキューバとの差は歴然としている。学術界ではTTに焦点を当てた研究が発表されているが、歴史や文学、人種やエスニックに関するものがほとんどで、これらはある程度TTの社会情勢に関する知識がないと読みこなせないため、一般の読者向きではない。

日本においてTTの知名度が低い背景には、長い間TTと日本の関係が希薄だったことが挙げられる。TTを訪れる日本人観光客は年間数百人程度で、ほとんどが毎年2月ないし3月に開催されるカーニバル目当てである。エネルギー関連の商社マンが出張ベースで訪問することがあっても、駐在員としてTTに滞在する日本人は僅かである。また、TTには、ブラジルやペルーのような日系社会は存在せず、永住者や長期滞在者の数は50人程度に過ぎない。このほかTTは、ラテンアメリカ・カリブ諸国の一員でありながらも、目まぐるしく政治・経済情勢が変化するキューバやベ

ネズエラ、ブラジルやメキシコといった国々の影に隠れてしまい、日本にとっては外交的な優先度がそれほど高くなかったと思われる。TT側から見ても、自動車や電化製品で日本のブランドの名前を耳にしたがり、日本製のアニメを観たり、寿司を口にしたりすることがあっても、日本がどこにあるのか、日本人がどのような生活を送りどのような問題を抱えているかまで把握しているTT人はそれほど多くない。日本と中国、韓国を混同しているケースも多い。

こうした流れに変化が見え始めたのは2013年以降のことである。同年5月末にバイデン米副大統領(当時)がTTを訪問、6月には習近平中国国家主席も中国の国家主席として初めてTTを訪問するなど、相次ぐ大国の首脳訪問が地元でも国際社会でも大きな話題となった。2014年7月には、安倍晋三氏が日本の首相として初めてTTを訪問し、安倍氏や日本の政務レベルがTTが加盟するカリブ共同体(カリコム)の14か国の首脳・閣僚と会談した。日本はその後カリコム諸国への政務レベルの派遣、防災や気候変動、水産分野などへの支援を継続したほか、交換留学生の派遣や受け入れ、日本語教育の普及を通じた学術交流にも一層力を入れるようになった。2016年2月のカーニバル最終日には、日本人女性が悲劇的な死を迎え、本事件については、地元だけではなく日本でも大きく取り上げられた。突然日本のテレビや新聞で「トリニダード・トバゴ」というキーワードを多く目にするようになり、「一体どんな国なのだろう」と疑問に感じた方も多かったはずである。

私は、2010年10月下旬から2016年12月下旬まで、TTにある日本大使館で専門調査員として勤務した。カリコム加盟国14か国1地域のうち、当時同大使館が管轄していた10か国の政治や外交の担当として、政府のプレスリリースや地元紙に目を通すとともに、閣僚や経済界関係者、有

識者から話を聞き、これら10か国に対する知識を深めた。また、職場の外でも習い事などを通じ、積極的に地元の人々、T T在住の外国人と交流した。ここでは、大使館員や大企業関係者、閣僚や政治家などのいわゆる特権階級や富裕層が集まる場では耳にすることがない情報を得ることができた。さらに、地元の人々と同じ生活トラブルを体験し、複雑な人間関係のトラブルにも巻き込まれ、良い意味でも悪い意味でもT Tを取り巻く問題、T T人の国民性やメンタリティを学んだ。

本書は、その6年2か月にわたるT T生活で得た知識や経験を基に、T Tを彩る多様な人種やエスニック、宗教のほか、これまで日本ではあまり注目されてこなかった、政治や経済、外交や日本とのつながり、現在T Tが抱える問題についても取り上げる。ステイール・パンやカーニバルだけではなく、多彩な魅力と複雑な問題を併せ持つ同国について紹介することを目的としている。日本におけるT Tへの理解、日本とT Tの交流促進に少しでも寄与できれば幸いである。

目次

はじめに iii

第1章 多民族国家トリニダード・トバゴの歴史 1

1 列強による統治時代と奴隷制・年季奉公人制 3

- (1) 列強によるトリニダード島とトバゴ島の争奪戦 3
- (2) 砂糖産業の発展とアフリカからの奴隷連行 4
- (3) 年季奉公人制を通じたインド人・中国人の流入 5
- (4) その他の移民と現在の人種・エスニシテイの人口分布 6

2 英国からの独立、頭脳流出と移民の受け入れ 7

- (1) 止まらぬ英語圏先進国への頭脳流出 7
- (2) カリブ域内外からの移民の受け入れ 10

■コラム1 —— 人見知りで保守的な国民性 15

■コラム2 —— 「トリニ・タイム」—— トリニダード・トバゴ人特有の時間管理 17

第2章 一般のトリニダード・トバゴ人の暮らし 19

1 「高所得国」にもかかわらず不便な生活 19

- (1) 一人当たり国民総所得（GNI）と都市の発展ぶり 19
- (2) 欠陥が目立つインフラ 21

2 物価は高いが低品質 22

(1) 日本よりも物価高 22

(2) 利用者が多いオンライン・ショッピング 25

3 10代前半で人生が決まる教育事情 25

(1) 教育制度 25

(2) 高等教育機関と政府による支援 27

4 独特のアクセント・語彙を持つトリニダード・トバゴ英語 29

(1) ネイティブ・スピーカーでも聞き取りに苦労 29

(2) 独特の語彙・表現 30

5 アフターファイブや週末の過ごし方 31

(1) 自分磨きや習い事に励む 31

(2) 地元で好まれる「ライミング」 33

6 趣味を活かした副業 34

(1) 副業は当たり前 34

(2) 副業はするけれども広報活動には不熱心 36

7 ショッピングが第一目的の海外旅行 37

(1) 近隣諸国よりも米国・カナダへの旅行の方が一般的 37

(2) ベネズエラで見たトリニダード・トバゴ人観光客 38

8 住宅事情 40

- (1) マイホーム所有が目標 40
- (2) 家の完成までは数年かかることも 41
- 9 車に対するこだわりと交通事情 42**
- (1) 車好きが多いトリニダード・トバゴ人 42
- (2) 注意が必要な地元住民の交通マナー 44
- (3) 深刻化する渋滞と駐車場不足 45
- 10 頻繁に開催されるパーティーと冠婚葬祭 46**
- (1) 大人になっても大規模な誕生会を開催 46
- (2) ゲストへの謝礼や配慮で頭を悩ますことのない結婚式 48
- (3) 格式よりも故人との思い出を重視する葬儀 50
- コラム3 — 単独行動よりも集団行動 52
- コラム4 — 本音と建前の使い分けと体裁重視 54
- 第3章 多文化社会トリニダード・トバゴの文化 56**
- 1 「史上最大のショー」のカーニバル 56**
- (1) トリニダード・トバゴ人にとっての社交場「フェテ」 56
- (2) トリニダード・トバゴ版紅白歌合戦「国際ソカ・モナーク」 58
- (3) その他のカーニバル直前の関連イベント 60
- (4) 「カーニバル・マンデー」の始まりを象徴するジュベ 62
- (5) 2日続くカーニバルのパレード 65

2 多彩な音楽 73

- (1) 20世紀最後のアコースティック楽器スタイル・パン 73
- (2) 大衆音楽カリブソ 76
- (3) 若者を中心に人気のソカ 78
- (4) インド系社会から生まれたチャットニー・ソカ 81
- (5) クリスマスに欠かせないパラン 83

3 生活・アイデンティティの一部となっている人種・エスニシティ・宗教 86

- (1) キリスト教関連の文化とイベント 87
- (2) ヒンドゥー教関連の文化とイベント 90
- (3) イスラム教関連の文化とイベント 94
- (4) アフリカ系の文化とイベント 97
- (5) インド系の文化とイベント 99
- (6) 中国系の文化とイベント 100
- (7) 先住民系の文化とイベント 102

4 トリニダード・トバゴの食文化 103

- (1) 高カロリーでスパイスを効かせた食べ物 105
- (2) 激辛か激甘か——スナックとスイーツ 108
- (3) ラム酒からソフトドリンクまで——高い人気を誇る国産飲料 110

5 自然溢れる観光地 111

111

- (1) トリニダード島北西部 112
 - (2) トリニダード島北東部 117
 - (3) トリニダード島中西部 120
 - (4) トリニダード島中東部・南東部 123
 - (5) トリニダード島南部 124
 - (6) トバゴ島西部 127
 - (7) トバゴ島東部 130
-
- 6 ノーベル賞作家らを生んだ土壌 131
 - (1) ノーベル賞作家V・S・ナイポール 131
 - (2) セントルシア出身でトリニダード・トバゴと縁が深いデレク・ウォルコット 132
 - (3) 政治活動家・クリケット選手として活躍したC・L・R・ジェームズ 133
 - (4) 初代首相となったエリック・ウィリアムズ 133
 - (5) その他の作家 134
-
- 7 国際大会で活躍する選手を生み出したスポーツ界 135
 - (1) 国民的スポーツのクリケット 135
 - (2) 2006年にW杯に出場したサッカー 136
 - (3) 多くのメダリストを出している陸上競技 137
 - (4) アテネ五輪で初のメダルを獲得した競泳 138
 - (5) パラリンピックでの活躍 139
 - (6) その他のスポーツ 139

■コラム5 — 自国民でも辟易するプライドの高さ 141

■コラム6 — 規則よりも人との関係を重視 142

第4章 英国式から独自の発展を遂げた政治体制 143

1 政治史 — 19世紀末から現代まで 143

(1) 英国からの独立 143

(2) 独立後 — 立憲君主制から共和制へ 144

2 現在の政治体制 150

(1) 大統領、首相及び議員の選出方法 150

(2) 独自の地方政府を持つトバゴ島 151

3 主要政党 152

(1) 二大政党 152

(2) 勢力を伸ばすことが困難な第三政党 153

4 選挙 154

(1) 有権者の要件 154

(2) お祭り騒ぎに発展する選挙キャンペーン 154

(3) 投票日当日とその直後 157

5 トリニダード・トバゴ政治の特徴 158

(1) 長期的視点に立った政策よりも短期で成果が出る「バラマキ」優先 158

(2) 根強い縁故主義	162
(3) ゴシップ・スキャンダル・失言で左右される政治	164
■コラム7 — 仕事よりもプライベート重視	167
■コラム8 — 自分とは異なる人種やエスニック集団の人々、外国人に対する差別意識	167
第5章 エネルギー資源を中心に動く経済と貿易	171
1 経済概観と近年の経済状況	171
(1) 増加から減少に転じた政府歳入	171
(2) マイナスに転じた実質国内総生産（GDP）成長率	173
(3) 近年悪化の一途を辿る失業率	174
(4) 外貨入手は早い者勝ち	175
(5) 5年で1・5倍に膨れ上がった公的債務	176
2 トリニダード・トバゴを代表する産業	177
(1) 国内経済を支えるエネルギー部門	177
(2) 非エネルギー部門	180
3 貿易	182
4 周辺諸国との経済統合に向けた動き	185
■コラム9 — 損得勘定が強く反映される人間関係	188
■コラム10 — 根強い男性優位主義	189

第6章 エネルギー輸出国・東カリブ地域の大国としての地位を活かした外交 191

1 トリニダード・トバゴの外交の特徴 191

(1) カリブ共同体（カリコム）加盟国と共通の利益を追求 191

(2) 国際機関で活躍する人材と在外公館設置状況 192

2 最も密接な関係を持つ米国・英国・カナダ 193

(1) 全分野で関係が深い米国 193

(2) 関係希薄化が目立つ旧宗主国英国 197

(3) 米国に次いで関係が密接なカナダ 199

3 共通の開発課題を持つカリブ共同体（カリコム） 201

(1) カリブ共同体（カリコム）の一員として利益を追求 201

(2) 周辺国との関係の希薄さ・軋轢 202

4 歴史的なつながりが強いアジアの大国 203

(1) 伝統的同盟国インド 203

(2) 急速にプレゼンスを拡大させた中国 205

5 他国とは異なる支援・協力内容で距離を縮めるベネズエラ・キューバ 210

(1) 近いけれど遠い隣国ベネズエラ 210

(2) 冷戦時代から密接な関係にあるキューバ 213

6 その他の国々との関係 215

- (1) 西欧・ラテンアメリカ諸国との関係 215
- (2) アジア諸国との関係 216
- (3) 中東・アフリカ諸国との関係 217

■コラム11 —— 性的マイノリティに対する差別・偏見 221

■コラム12 —— 恵まれすぎているがゆえに節約概念ゼロ 222

第7章 文化交流から経済協力まで広がる日本とトリニダード・トバゴの関係 226

1 日本の対トリニダード・トバゴ政策 226

2 初の日本の首相によるトリニダード・トバゴ訪問 227

- (1) 初の日・カリコム首脳会議及び日本の首相夫人と地元住民との交流 227
- (2) 日本の首相夫妻来訪に対する地元の反応 229

3 経済・開発協力関係 231

- (1) 日本企業進出状況 231
- (2) 二国間貿易 234
- (3) 開発協力関係 234

4 日本の国際化に貢献するトリニダード・トバゴ人英語教師・留学生 235

- (1) 日本の中学校・高校に派遣されるトリニダード・トバゴ人英語教師 235
- (2) 日本政府の支援で来る国費留学生 238

5 スティール・パン・コミュニティの中で圧倒的プレゼンスを誇る日本人スティール・パン奏者 239

(1) 日本人スティール・パン奏者のプロフィール 239

(2) 日本におけるスティール・パンの普及 240

6 アニメやスポーツを通じて親日家になる若者 243

7 自動車を通じた日本との関係 244

8 日・トリニダード・トバゴ関係に影響を与えた近年の2つの事件 247

(1) トリニダード・トバゴ人にも大きな衝撃を与えた東日本大震災 247

(2) 日本人スティール・パン奏者の死 250

■コラム13 — 少ない選択肢・情報量もたらした外への関心の薄さ 256

■コラム14 — 切り替えと乗り換えを繰り返す男女関係 259

第8章 独立50周年を経た今直面する課題 262

1 悪化の一途を辿る治安 262

(1) 世界最悪の殺人発生率 262

(2) イスラム過激派によるテロの脅威 270

2 社会全体に蔓延する汚職 273

(1) 腐敗度が悪化するトリニダード・トバゴ 273

(2) 生活の隅々にまで染みついている汚職 273

(3) 国際問題にまで発展した汚職事件 275

3	劣悪なカスタマーサービスと人材開発の必要性	277
(1)	トリニダード・トバゴ滞在初日からカスタマーサービスの問題に直面	277
(2)	地元住民も在住する外国人特権階級も被害者	279
4	医療サービスの質低下	281
(1)	「医療費無料」のカラクリ	281
(2)	私立病院でも劣悪な医療サービス	282
(3)	医療人材不足で悲鳴を上げる現場	284
5	広がる所得・地域格差	287
(1)	国際機関の指標では比較的好成績を収めているトリニダード・トバゴ	287
(2)	統計では見えない格差	290
■コラム15	—— 高い美意識とミスコン文化	296
	主要参考文献	301
	著者に際立つ「快活な作風」—— 解説に代えて	伊高浩昭（ジャーナリスト）
		306
	あとがき	310

本書に掲載した情報は、本文や注に断りがある場合を除き執筆段階のもので、参照したデータ、ウェブサイトのアドレスはすでに変更されている可能性があります。

第1章 多民族国家トリニダード・トバゴの歴史

世界銀行の統計によれば、2016年のトリニダード・トバゴ共和国（TT）の人口は約136万人である。^{*1} 日本でいえば、京都市よりもやや少ない人口である。

トリニダード島とトバゴ島の2つの大きな島、その他複数の島から成るTTは、5128平方キロメートルの面積を持つ。これは千葉県とほぼ同程度である。

ショッピングモールやイベント、学校などが集まる場所では、TTの人種やエスニシティの多様性を認識させられる。二大エスニック集団のアフリカ系やインド系に加え、中国系や白人系、中東系や先住民系、そして混血の人々を目にするほか、肌の色もバリエーションに富んでいる。人や街、通りの名前も欧米系やインド系、中国系や中東系、ラテン系のもまで多種多様である。

2011年の調査によれば、人種・エスニシティの構成は、アフリカ系34・22パーセント、インド系35・43パーセント、アフリカ系及びインド系の混血7・66パーセント、その他の混血15・16パーセント、白人系0・59パーセント、中国系0・3パーセント、先住民系0・11パーセント、シリア・レバノン系0・08パーセント、その他0・17パーセント、不明6・22パーセントである。^{*2} これだけを見ても、人口が少ない割には、人種やエスニシティが多様であることが分かる。

トリニダード・トバゴの人々——多様な人種・エスニシティ



[上段] ①中国系、ポルトガル系、アフリカ系、白人系の混血 ②アフリカ系、中国系、ベネズエラ系の混血 ③インド系、スコットランド系の混血 ④ベネズエラ系、カリブ族、中国系、アフリカ系、ポルトガル系の混血
 [下段] ⑤アフリカ系、カリブ族の混血 ⑥北アイルランド系 ⑦ベネズエラ系、スコットランド系、カリブ族、インド系、アイルランド系、クレオール系の混血 ⑧ポルトガル系、ラテンアメリカ系、アフリカ系の混血



本章では、歴史的経緯に触れながら、TTがどのような人々から成り立ち発展してきたのかを明らかにする。また、TTが先進国に移民を送り出しながらも、一方で周辺のカリブの島々、南米諸国、アジアからも移民を受け入れるというユニークな特徴を持つ国であることも紹介する。

人見知りで保守的な国民性

「カリブの人々」というと一般的には陽気なイメージがある。トリニダード・トバゴ（TT）は、日本では「ラテンアメリカ」または「中南米」として、スペイン語圏の国々と同一視される傾向にある。TT人に対してもまた、いわゆるアミーゴ精神に溢れフレンドリーなラテン系の人々と同じような気質を持つというイメージを抱きやすい。

しかし、実際には、初対面の人間に対し無表情あるいは不愛想なTT人が少なくない。

米国やカナダ、ヨーロッパでは、初対面の相手に対して微笑むことが多い。メキシコや中米、キューバやドミニカ共和国といったラテンの国々では、出会って間もないのにまるで昔から知人の

ように話しかけられ、あっという間に相手との距離が縮まることも少なくない。こうしたホスピタリティを期待していた私にとって、TT人の応対は衝撃的だった。しばらくの間、自分が何か失礼なことをしたのだろうか、自分は嫌われているのだろうかと悩んだほどである。

仕事やプライベートで出会った人々と連絡先を交換しても、こちらから連絡しない限り連絡がくることはほとんどなく、「また今度連絡するね」、「今度会おう」という言葉が、ただの社交辞令であったことを知る。逆にすぐに連絡がきた場合は、急用か下心がある可能性が高い。自分から行動、縁をつなげる努力をしない限り、人間関係が広がりにくいのである。

私は、そのうち、彼らが初対面の人々になかなか心を開かない、他人を簡単に信用しない人見知り、それも極度の人見知りであることを悟った。特に、自分とは別の人種やエスニック集団の人々、外国人に対する警戒心はなかなか解けない。これは、日本人に似ている気質かもしれない。

当初は、ＴＴ人の無愛想な態度に気分を害することも多かったが、現地の歴史を学ぶにつれ、こうした極端な人見知り、そして時には保守的な態度が奴隸制や年季奉公人制、複雑な人種やエスニック関係に由来するものではないかと考えるようになった。農園主・白人をはじめとする支配者や富裕層による搾取や差別、人種やエスニック間の複雑な関係が国民の意識に大きく影響してきたのではないか。自分や家族を守るために簡単に他人を信用しないという考えが広がり、それがＴＴ人の国民性になっていったのではないか、というものである。

他方、不思議なのは、彼らがとつきにくい面を持つ一方で、SNSの友達申請にはさほど抵抗がない点である。日本人の場合は、プライバシー上の理由、不必要な人間関係のトラブルやストレスを避けるために、友達申請には慎重で、SNS上でも礼儀をわきまえることが当然とされる。

ＴＴ人の場合は、職場の同僚に限らず、学校や習い事、パーティーなどで顔を合わせるのみの知

人にも友達申請をすることが多いが、その後実際面と向かって会った時に挨拶や雑談をするかというところではない。

地元の友人によれば、ＴＴ人は自国民同士に対しても人見知りで排他的なところがあり、別のグループに所属している者同士が仲良くなるのは簡単ではないそうだ。

「トリニ・タイム」

——トリニダード・トバゴ人特有の時間管理

カリブ全般に共通することだが、トリニダード・トバゴ（TT）人はのんびりしており、急かされることを嫌う。

スーパーマーケットでは、レジの前に長蛇の列ができてレジ担当の店員がスピードを上げることとはない。レストランでは、混雑していなくても注文した料理が出てくるまでに30分程度かかるのが普通で、最悪の場合1時間近く待たされることもある。逆に10分以内で出てきた場合は驚いてしまうほどだ。ファーストフード店でも場所によっては30分以上待たされることがあり、「ファーストフード」の意味がない。銀行では、基本的には硬

化・紙幣計数機がなく、手作業で現金を数える。通帳記入やその他の手続きも全て手書きである。店内が混みあっても行員は自分のペースを貫いている。

インターネットや配管に不具合が生じ業者を呼んでも、希望した日時に来る確率は3割といったところで、大抵予定変更になる。作業自体にも時間がかかるため、大がかりな修理になると半日以上要することもある。

また、約束の時間に間に合わないことは普通で、「あと10分で着く」と言ったにかかわらず、1時間近く遅刻することもある。「あと5分」「あと30分」と言われても真に受けず、その3倍以上の時間がかかると思積もった方がいい。

当然ながら会議もイベントも時間通りには始まらない。時間通りに始まるのは、テレビ生中継のイベント、海外の要人との会議ぐらいである。皆、時間通りに始まらないことを承知しており、「トリニ・タイム（トリニダード・トバゴの時間）」と言って、余裕を見せる。開始予定時間の10分前ぐ

らいになってから少しずつ人が集まり、開始から1時間ほど経過した頃に7割ぐらいの出席が確認できるようになる。

日本の都会に住む人々は多忙な日常に慣れていするため、短時間で支度をし、複数の用事を短時間で手際良く処理する。これは、T T人が最も苦手とするものの一つである。彼らの場合、朝の渋滞ラッシュに巻き込まれる可能性が高いことに加え、身支度にも朝食の支度にも時間をかけるため、まだ夜が明けていないうちから起床する者が多い。女性の場合、夜遊びやイベントには着飾って出席することが常識とされているため、衣装選びやヘアメイクのセットに時間をかける。

商談の場では、依頼事項に対する回答が締め切りまでに返ってくることを期待してはいけない。先方が依頼を受けていることを忘れていることも多いため、辛抱強く待つとともに、タイミングを見計らって根気よく催促し続けることが必要になる。

T Tの生活では、辛抱強さと、時には諦めの気

持ちが求められる。他方、こののんびりした生活に慣れると、日本や先進国に行った時に、物事がスピーディーに進みすぎて、逆に新鮮な気持ちになる。

第2章

「一般のトリニダード・トバゴ」人の暮らし

1 「高所得国」にもかかわらず不便な生活

(1) 一人当たり国民総所得(GNI)と都市の発展ぶり

意外と知られていないが、トリニダード・トバゴ(TT)は、ラテンアメリカ・カリブ地域では人口一人当たり国民総所得(GNI)がバハマに次いで高く、世界銀行の基準では、日本や米国が属する「高所得国」のカテゴリに入れられている。2016年の人口一人当たりのGNIは、バハマが2万6490米ドルであるのに対し、TTは1万6240米ドルである。^{*1} ちなみに、ラテンアメリカ・カリブ諸国の平均は8260米ドルとなっている。^{*2} 域外国でTTと同レベルの水準に達しているのは、東欧のスロバキア(1万6810米ドル)である。^{*3} 私が赴任した直後の2010年末においては、TTは「高位中所得国」として位置付けられていたので、この5年の間に「高所得国」に格上げされたということである。

TTに初めて足を踏み入れた外国人は、「意外と発展しているので驚いた」と口にすることが多い。



ポート・オブ・スペインの街並み（2017年8月17日、ポート・オブ・スペイン、筆者撮影）

確かに、ピアルコ国際空港からポート・オブ・スペインに向かう途中車窓から外を眺めると、主要高速道路は整備されており、ポート・オブ・スペイン中心部に近づくにつれ、近代的なビルが目の前に迫ってくるので、発展している印象を受ける。富裕層や外国人駐在員が集まるエリアには、豪華なタウンアパートが立ち並び、高級レストランや輸入食材店にもアクセスしやすい環境にある。大型ショッピングモールには、デザイン性の高い衣料品やアクセサリーを陳列した店のほか、マクドナルドやハーゲンダッツ、米国発のカジュアル・レストランTGIフライデーズといった日本でも馴染みの飲食店が並び多くの人で賑わっている。映画館は日本や米国のもと同様の造りで、新作映画が米国とほぼ同時タイミングで封切られている。

TTを「遅れた国」と思っていると、その思い込みとのギャップを認識させられる。

(2) 欠陥が目立つインフラ

トリニダード・トバゴ(TT)の大都市にいてと思つたよりも発展しているので、短期間の滞在では大きなトラブルに直面することはあまりない。

しかし、実際に現地で生活してみると、「高所得国」であるにもかかわらず、不便なこと、物事が思い通りにいかないことが多いことに気が付く。

主要高速道路は整備されていても、その他の道路は穴だらけで、注意して運転しなければならぬ。修復されている箇所はパッチワークのように見える。水道や排水溝が十分に整備されていない地域もある。地方や開発が遅れた地域では、相当以前に壊れたと思われる道路や橋が放置されている様子、政権交代により前政権が進めていた大型インフラ・プロジェクトの工事が放棄され荒地となつている様子も目にする。富裕層と貧困層の住む地域の格差は歴然としている。後者に一般のTT人が近づくことはほとんどない。完全に周囲から取り残された世界が広がっている。

光熱費が安価でも、停電・断水が頻繁に発生する。それも無計画停電・断水があまりにも多い。自然災害が原因の場合もあるが、大半は国営の電気会社や水道会社による人的ミスや怠慢による。富裕層が多い地域に住んでいても安心はできない。

私もこの断水・停電に散々悩まされてきた。数時間で復旧すればまだ良い方で、時には何日も不自由な思いを強いられることもある。TTのほとんどの家庭が断水時に備えて水タンクを設置しているのだが、タンクの水も足りなくなるような断水が続くことも珍しくない。用心深い人は、水タンクのほかにあらかじめ市販の巨大水ボトルを何本か購入したり、空のボトルに水を貯めておいた

りと万が一に備えている。

また、外見は立派とはいえ、欠陥がある、アクセスが不便な建物も多い。地元の気候や現地地の形に合った建物なのか、利便性を考慮しているのかといった点について疑問を抱かずにはいられないものが少なくない。

私は、6年間に3つのアパートで暮らしたが、その間突然床の複数のタイルが大きな音を立てて割れる、上階から大量の水漏れが発生し私の部屋の天井の一部が崩れ落ちる、壁紙が剥がれるといった被害に見舞われた。

私の元上司や元同僚も停電・断水に加え、配管トラブルや部屋のカビ発生など様々なトラブルを体験してきた。

このほか、公的機関やスーパーマーケット、教育機関や銀行における非効率性や劣悪なカスタマーサービスもまたITの生活を不便と感じる大きな要因となっている。これについては8章3で述べることにする。

2 物価は高いが低品質

(1) 日本よりも物価高

トリニダード・トバゴ(TT)の生活で悩みとなるのは、物価の高さである。物資の大半を米国やカナダから輸入しているため、日本での購入価格を上回る物ばかりなのだが、質と価格の両方を重視する日本人からすると首をかしげたくなくなるような粗悪品も少なくない。これに加えて、

1 「史上最大のショー」のカーニバル

(1) トリニダード・トバゴ人にとっての社交場「フェテ」

トリニダード・トバゴ(TT)のカーニバルは、キリスト教の灰の水曜日の直前の月曜日と火曜日の2日間にわたって行われる。これらは、イースター(春分の日の次の満月の後に訪れる最初の日曜日)の日によつて変わり、毎年2月ないし3月になる。

毎年年初めからカーニバル直後までは、全国各地で「フェテ(Fete)」と呼ばれる野外パーティーが開催される。基本的には、複数のアーティストによるライブ・パフォーマンスが繰り広げられ、ステージの周りに食事や飲み物を販売あるいは提供するテントが並ぶ。英国の音楽フェスに近いイベントと言えば分かりやすいだろうか。

イベント会社のほかに、学校やNGOなどが主催しているものもあり、学校の場合は機材・備品の購入費、NGOの場合は活動費を集めることを目的としている。費用は、最低でも250TTD

ル（日本円にして約4000円）で、大物アーティストや海外のアーティストが出演するイベント、食べ放題・飲み放題のイベントになると料金が高額になる。毎週のようにフェテに繰り出している、数万円の出費に達する。

アーティストのライブを楽しむこともフェテの醍醐味だが、異性との出会いもまたフェテに足を運ぶ動機となっている。車社会のTTTでは、日本やヨーロッパのように街歩きをする習慣がないため、外で他人と出会う機会は多くない。フェテでは、一定のセキュリティが確保されている上に、大勢の人間が一つの場所に密集するため、異性と出会うチャンスが高まる。実際、フェテに行くと日本では目のやり場に困るような露出度の高い服をまとった女性、日常生活で出会うことのない絶世の美女を目にすることが多い。また、ショートパンツ姿の女性が多く、ロングスカートやフルレングスのジーンズ姿は逆に目立つ。TTT人男性は、一般的にヒップが大きい女性が魅力的と考えているため、女性側も男性の好みに合わせ、ヒップや太もも周辺を強調したショートパンツを選ぶ。

富裕層を対象とした高額イベントとなると話は別であるが、一般のフェテには中の下から上流まで様々な階級の間が入りしており、異性との出会い、新たな知人や友人作りを通じた社会的地位上昇を狙う人々にとっては格好の社交場と捉えられている。また、恋人や友人だけでなく、赤の他人とも腰をくねらせる「ワイン（wine）」などの卑猥な動きをして思い切り羽目を外しても誰にも咎められない。この時期、主要紙は、カーニバル関連イベントの記事ばかりを掲載するのだが、中でもフェテ関連の記事はワインの写真で埋め尽くされる。

アーティストにとっても、フェテは稼ぎ時である。カーニバルのオフ・シーズンは、イベントに出演する機会が減り当然ながら収入も下がる。自分の生活を安定させるためには、できるだけ多く

のフェテでパフォーマンスする必要がある。一晩で2つや3つのフェテに出演するアーティストもいる。中には、歌いすぎて喉を痛め擦れ声になったり、ワインの踊りすぎて腰を痛めたりする者もいる。

フェテ参加はコストだけでなく体力も要し、毎週のように夜中まで遊んでいると、生活が乱れる。この時期には、仕事に遅刻したりドタキャン休みしたりする者が増えるが、フェテが原因と考える者も少なくない。

(2) トリニダード・トバゴ版紅白歌合戦「国際ソカ・モナーク」

カーニバル直前の金曜日は、「ファンタスティック・フライデー」と呼ばれる。毎年、この日にポート・オブ・スペインの国立競技場で「国際ソカ・モナーク」と呼ばれるソカ(本章②③)の大会が開催される。

同大会は、スローテンポでメロディを重視した「グルービー・ソカ (Groovy Soca)」、アップテンポでパワフルな「パワー・ソカ (Power Soca)」の2部門から成り、予選や準決勝を勝ち抜いたアーティスト約20組(各部門10組程度)が、それぞれの部門の王者の座を巡って争いを繰り広げる。その年にヒットした曲、人気を博したアーティストのパフォーマンスを一度に楽しむことができる。トリニダード・トバゴ(TT)版「紅白歌合戦」と言ってもいいであろう。

とはいえ、国際大会であるため、TT以外の国出身の出場者もいる。最近では、グレナダやセントビンセント及びグレナディーン諸島のアーティストの活躍も目覚ましい。

また、日本のアーティストもはるばる日本からやって来て大健闘している。2007年には、レ



国際ソカ・モナーク（2013年2月8日、ポート・オブ・スペイン、筆者撮影）

ゲエ歌手のMINAMIが「シャナナ☆」で総合第8位、女性としては第3位に輝いた。MINAMIの「シャナナ☆」のビデオクリップには、ソカ・モナークのパフォーマンズのほか、彼女がカーニバルに参加している様子も収録されており、日本人がITのカーニバルやソカについて理解を深めるには、分かりやすいものとなっている。MINAMIのほかには、2014年に日米-halfのAnn-Gが「ウィー・ラブ・カーニバル」でパワー・ソカ部門への出場を果たした。

ソカ・モナークのライブもほかのイベントと同様長丁場で、前半はグルービー・ソカ、後半はパワー・ソカの時間となる。アーティスト1組の演奏時間は10分にも満たないが、舞台セットの組み立てに時間を要するため、次のアーティストの出番になるまで時間がかかる。グルービー・ソカが大体午後9時から深夜1時頃、パワー・ソカが深夜1時頃から早朝の5時頃まで続く。ステージを間近で見ると、長時間の立ち見覚悟でステージ前のスタンディング席に行く必要があるが、時間が遅くなればなるほど大混雑し抜け出しにくくなる。当然ながら治安面のリスクも増す。私は、毎年最後の方は睡魔や周囲で大暴れる大群衆と闘いながら鑑賞していた。

一年に一度の晴れ舞台ということで、アーティスト

日本人と交流を深めたいと、日本とのつながりを維持するよう努めてきたそうだ。現在、彼は米国のシカゴ在住で、ここでも日本語サークルに通い、これまで出会った日本人の友人・知人との連絡を欠かさないように努めている。2014年には久々に日本を訪問し、かつてのホストファミリーや友人と再会し、感激の日々を送ったそうだ。彼のような日本の大ファンは、日本とTTをつなぐ非常に貴重な人材である。

5 スティール・パン・コミュニティの中で圧倒的プレゼンスを誇る 日本人スティール・パン奏者

(1) 日本人スティール・パン奏者のプロフィール

日本からトリニダード・トバゴ(TT)に訪問する観光客は年間数百人程度と極端に少ない。その大半がカーニバル・シーズンに渡航する。中でも、全国大会「パノラマ」(3章2(1))出演を目的として来るスティール・パン奏者が圧倒的割合を占める。毎年音が明けると、全国各地のスティール・パン・バンドの練習場(パン・ヤード)で「パノラマ」に向けた練習が始まるが、そこで日本人の姿を見かけるが増える。多くは20〜30代の若者で、日本の音楽大学の卒業生あるいは在校生、日本のスティール・パン教室の生徒である。圧倒的に未婚の女性が多い。2月、3月は日本では年度末に当たり、普通の会社では休みを取りにくい時期である。したがって彼らは、比較的自分の都合で休暇が取得しやすいアルバイトや派遣職員として渡航費用を稼いでいる。そして、現地滞在中は、日本人同士でルームシェアしながらやりくりしている。

(2) 日本におけるステイール・パンの普及

トリニダード・トバゴ(TTT)を発祥とするステイール・パンは、海外に住むTTT人移民やステイール・パン愛好家の外国人によって、米国や英国、カナダを経て日本にも広まっていった。日本でステイール・パンがメジャー・シーンに躍り出たのは、ニュー・ミュージック系の演奏にYMOの細野晴臣が使用し始めた1975年頃のことである^{*21}。日本におけるステイール・パンの受容と普及を研究している富田によれば、1970年代から1980年代は、日本政府や日本企業が遊園地・博覧会などでステイール・パン・バンドを大道芸的に見せるとともに、「カリブ海」 「TTT」からやってきたことを強調し「国際色」を表そうとしたと指摘できる^{*22}。1990年代になるとワールド・ミュージック・ブームの到来に伴い、TTTの音楽として知られるようになると同様に、ヤン富田や原田芳宏をリーダーとする「PANCAKE」によって、ステイール・パンの知名度がさらに上がった^{*23}。関東では、1994年に「スチールドラム振興会」が設立され、ステイール・パンの普及体制が強化された。

同時期、各地でステイール・パンを購入する学校が出始め、いくつかの自治体やその他有志がオーケストラやバンドを結成するようになった^{*24}。国際交流や町おこしの一環としてステイール・パン使われることも増えた。自治体によるステイール・パン・オーケストラとしては、富山県福野町の「スキヤキ・ステイール・オーケストラ」が北陸を中心として演奏実績を積んできた^{*25}。また、鹿児島県の宝島では、島を挙げてのステイール・パン・バンド活動が行われているほか、静岡県伊東市や愛知県犬山市にも2000年頃よりステイール・パン・オーケストラが結成された^{*26}。

あとがき

「なぜトリニダード・トバゴ（TT）行きを決めたのか？」——これは私が今でも頻繁に受ける質問の一つである。

私は、日本人の父親とフィリピン人の母親のもとに生まれたが、学部時代からフィリピンではなくラテンアメリカ・カリブ地域を専門としてきた。理由は単純で、自分の好きな歌手であるグロリア・エステファンがキューバからの亡命者で、歌詞の背景を知りたいと考えたためである。学生時代は部活や習い事で、ポップスや映画音楽、合唱曲などを人前で披露してきたが、グロリアの曲も含めスペイン語の曲もうまく歌えるようになりたいと考えていた。また、フィリピンもスペイン領時代を経験し、今でも言語や文化にスペイン時代の名残が見られる。こうした類似点も私にとっては興味深いものに映った。キューバに始まり、メキシコや中米、南米、米国のヒスパニック／ラティーノ系について一通り学んでいく中で、「いつかラテンアメリカ・カリブ諸国に住んでみたい」という思いが膨らんでいった。そのような中で、偶然2010年春にTTにある日本大使館が専門調査員を募集していることを知り、応募を決めたのである。

しかし、財団法人での安定した正職員の身分を捨てて、先の保証がない派遣職員の専門調査員としてTTに赴任することは大きな賭けであった。私も、世界の大半の人々と同様、ラテンアメリカとTTを含むカリブ共同体（カリコム）の国々を同一視していたため、赴任当初は、TTの文化だけではなくTT人の気質や地元の習慣の違いにも戸惑いを覚えることが多かった。小国の島国であるがゆえの閉塞感や排他的雰囲気、葛藤や失望感、怒りを感じることもあった。また、複雑怪奇な人間関係のほか、法外な医療費を請求された手術・入院体験、公的機関・民間機関での各種トラブル、住居関連のトラブルにも悩まされ、振り返ると「壮絶な体験」の数々だった。元上司の「貧乏くじを引いたような状況」という言葉のとおりであった。

このように苦勞の絶えない6年2か月であったが、それでもめげず、仕事とプライベートの両方で、様々な人種・エスニック集団、階層の人々と交流し、外国人が立ち入らない地域も含めTT各地を訪問することで地元社会を知るよう努めた。公務でTTに6年も滞在した日比ハーフは恐らく私が初であり、異例な選択、行動を取り続け周囲の人々の度肝を抜いたことと思うが、独自路線を貫いたことで、他の人々とは異なる視点から物を見ることができたのではないかと考える。

私が着任した2010年末のTTは、約15年ぶりの政権交代、史上初の女性首相誕生で国中に高揚感がみなぎっていた。独立50周年を迎えた2012年には、ロンドン五輪で36年ぶりの金メダルを手にし、まさに50周年にふさわしい華やかな年であった。2013年には、バイデン米副大統領に続き習近平中国国家主席までもが来訪し、外交面での注目度も高まった。ところが、その数年後には、相次ぐ政治スキャンダルが祟り、パサード・ビセッサ政権の支持率が低下、ローリー党首率いる人民国家運動（PNM）が勢いを盛り返し政権を奪取した。私はさらに、経済停滞に伴う大

量の失業者の発生、外貨の入手困難、治安の悪化で、街の雰囲気为重々しくなっていく様子も目撃した。

一方、同時期に、日本とT.T、ジャマイカの外交関係樹立50周年（2014年）、日本企業によるエネルギー大型投資案件の進展などもあり、特に任期2期目から3期目前半の2013年から2015年は多忙を極めた。日本の総理大臣によるT.T、ジャマイカ訪問という大イベントが実施されたのもこの時期であった。私としては、自分の母校の上智大学と西インド諸島大学（UWI）の交流が進んだことも嬉しいニュースであった。

カーニバルや多彩な音楽、宗教やエスニック色の強いイベントを通じて、地元の豊かな文化を堪能することができたのも光栄であった。

こうして見ると、私は、日・T.T関係にとっても、T.Tにとっても重要な時期に現地滞在中、非常に貴重な経験をしたと言える。

専門調査員としては異例の「同一公館同一ポスト」を3期にわたって務め上げることが出来たのは、私を戦力として受け入れ、そして私の任期延長を希望して下さった元上司・元同僚、外務省関係者の方々によるところが大きい。

私の可能性を信じ、常に的確な助言を与え、そして本の執筆を強く勧めて下さったジャーナリストの伊高浩昭先生には心から感謝を申し上げたい。政治や経済、外交だけではなく、音楽や文学、映画にまで広がる先生のラテンアメリカ・カリブ地域についての知識、好奇心、現場主義の取材姿勢には見習うべきことが多かった。また、伊高先生とともに、私に様々な機会を与え応援して下さい立教大学ラテンアメリカ研究所の職員の方々、私を新たな世界へと導いて下さった同大学ラ

テンアメリカ講座の講師、受講生の方々の存在も大きい。

私のもう一つの母校である亜細亜大学から、国際関係学部のSNSを通じてTTを含むカリブ共同体（カリコム）の国々を2か月ごとに紹介する機会を与えていただいたことも、日本におけるカリコム地域の知名度を上げるという意味では大きかった。学部時代から私の強力な理解者として見守って下さっている元指導教授の中野達司教授、同SNSをきっかけとしてお世話になった角田宇子教授にも謝意を表す。

そして、私にとっての初めての本の出版を承諾して下さった論創社の森下紀夫社長、松永裕衣子さんにも謝辞を述べなければならぬ。松永さんには、1年近くにもわたって原稿を辛抱強く待っていただいた。校正作業を担当していただいた小山妙子さんほか、関係者の方々にも感謝を申し上げる。

貴重な写真資料の無料での使用を承諾して下さったトリニダード・ガーディアン紙の関係者の方々にも厚く御礼申し上げる。同紙の写真を挿入したことで、読者の理解の助けにつながったと言える。

突然異国の地に行った家族を失うという耐え難い悲しみを抱えながらも、本書で麻美さんのことを言及することに承諾して下さった長木谷家の皆様、長木谷家の方々との連絡を取り持っていたいた方々にも謝意を述べなくてはならない。麻美さんの死は、当時事件への対応にも携わった私としてもショックングかつ悲しい出来事であった。改めて一日も早い事件の解決を願う。

さらに、忘れてはならないのは、アップダウンの激しい6年2か月の間、遠いアジアの国から来た外国人の私を受け入れ、そして人種・国籍・言葉の壁を越え相談に乗ってくれたTTの友人、同

国在住のフィリピン人コミュニティの存在である。滞在時には、数々のトラブルや理不尽な出来事で、意気消沈したり、周囲の人間に対する警戒心が強まったりしたこともあった。帰国から半年ほどは心身ともに憔悴し、TTでの思い出を振り返ったり、TTに関わるモノやヒトと接したりすることが辛い時期もあった。しかし、彼らは変わらず遠くから私を励まし、温かく見守ってくれた。何人かの友人には本書の執筆に協力してもらった。友人たちと一緒に見た景色、聴いた・踊った音楽、口にした食事に関する思い出は、今も私の一部であり続けている。

遠く離れた世界から、絶えず私の動向を気にしてくれていた日本在住の家族や友人、フィリピンをはじめ世界中に散らばる親戚・友人の存在も大きかった。

改めて、私を支えてくれた皆様に深く感謝申し上げます。

最後に、数多くの本の中から本書を手にとって下さった読者の皆様に心より御礼を述べたい。

2018年6月

鈴木 美香

鈴木 美香（すずき・みか）

1980年、日本人の父親とフィリピン人の母親のもとに生まれる。

2002年3月、亜細亜大学国際関係学部国際関係学科卒業。

2004年3月、上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士前期課程（修士課程）修了。修士課程修了後、日本に来る外国人研修生・技能実習生を支援する財団法人での勤務を経て、2010年10月から2016年12月まで、在トリニダード・トバゴ（TT）日本国大使館の専門調査員として、カリブ10か国の政治・外交に関する情報収集・分析業務に従事。

2017年12月より、新興国の金融・経済・政治を調査する財団法人に勤務し南米を担当。

2018年4月より、国土館大学にて非常勤講師も兼務。

これまでに米国のキューバ系難民・移民、TT事情、カリブ諸国の外交関係等に関し、学術雑誌等に複数のレポートを発表。

また、研究活動の傍ら、日本や海外でのイベントにおける歌・ダンスの披露、旅行等を通じ、自身のルーツである日本とフィリピンだけではなく、ラテンアメリカ・カリブ諸国とのつながりも維持している。

トリニダード・トバゴ——カリブの多文化社会

2018年9月1日 初版第1刷印刷

2018年9月10日 初版第1刷発行

著者 鈴木美香

発行者 森下紀夫

発売元 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

<http://www.ronso.co.jp> 振替口座 00160-1-155266

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1744-6 ©2018 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます。